

## 生涯教育専攻 平成22年度卒業論文要旨

飯田 元樹

### 「未婚者の名付けに対する意識」

本研究では、未婚者の名付けに対する意識について調査した。まず本研究では、現在の名付けについて調べ、読みにくい名前の子どものが増えた原因について、参考文献をもとに明らかにした。そして、その先行研究からわかったことが、現在の未婚者にも同じようにいえるのかどうかを、天理大学生を対象としたアンケート調査によって調べ、未婚者にも現在の名付け事情と同じような傾向があるのかということ調べた。その結果、実際の未婚者にも、読みにくい名前を自分の子どもにつける可能性があるということがわかったが、それと同時に未婚者の意識からは、読みにくい名前が決して悪いとはいえないということも明らかになった。本研究では、読みにくい名前が決して子どもに悪影響を与えるわけではないという結果に至ったのである。

(指導担当：福嶋)

上野 良輔

### 「車と趣味・アウトドアの関係性—若者の車の所持率とアウトドア人口—」

現在の若者が、車離れしていると言われている。しかし、本当に現代の若者の車の保有率が減っているのかが気になり調査してみた。それと関係して、アウトドア人口が減少しているのではないかとということにも視点を置いてみた。

主な目的として、「車の所持」と「趣味・遊び」は関係しているのかということ調べる。「趣味・遊び」と並行して、今後「アウトドアレジャー」「遠出」に興味とその関係性を調べる。

私の仮説は、若者の車の保有率が減少することによりアウトドア人口も減少しているのではないかとということである。若者の車の保有率を上げることで、アウトドア人口も増加するのではないのだろうか。

若者が車を持たないのは、車に対する意識が変わってきているからなのではないだろうか。昔は、「車を持つことで一人前の大人になれる」「彼女ができた時、車でデートをしたい」などの意識が少なからずあった。このような意識が全くと言っていいくらい薄れてきているのが現実であり、この意識変化は若者の遊び関係か来ているのではないかと思う。

若者の車の所有率が上がれば、アウトドアレジャーなどに行く回数・興味を持つ機会が増え、若者に活気があふれるのではないだろうか考える。

(指導担当：石飛)

## 大隈 賢太郎

### 「指導者のいない学生クラブのチーム作りと上回生の役割」

指導者のいない学生クラブのチームで、チーム全体がまとまっており上昇傾向にあるチームを作る為には、チームの軸となる上回生が全体の見本となるような言動をとれているのが重要となる。上回生（幹部）が下級生を始め、チームに求めたいものがあるならば、公言すると共に、上回生自身が行動で意思を示さなければならない。指導者のいないチームでは、学年問わず指摘などできる立場にいる人物の不在のため、チーム内での練習意識の差などが生まれやすく、軸となる上回生が掲げたチーム目標や方針に反するような言動を上回生自身がしていると、チーム全体の士気は下がっていく。

私自身大学四年間、様々な大学の友人から話を聞いていると、このような状況にある例が指導者のいないチームの多くを占めているように感じる。よって、チームを強くしようと練習メニューや方針などを見直す前に、まずチームの中で上回生や他の部員に見られる立場にある人物が見本となるような言動ができているかを見直すことが、指導者のいないチームでは必要ではないかと考えられる。

(指導担当：福嶋)

## 加藤 真寿美

### 「卒業論文へのやる気の要因とその効果的な指導法について」

本研究では卒業論文を課せられる大学4回生が、卒業論文というものをどのように捉え、どのように取り組んでいるのか実態を知るため、インタビュー調査を実施し、それをもとに、卒業論文に対するやる気の促進要因、阻害要因、そして効果的な指導法を考察した。

論文を書く本人が題目や内容を深く理解し、論文の終着点を自分で見つけだす。それにより、理解する楽しさや書き進める楽しさが加わり、やる気は大きく促進される。反対にビジョンを持たなければ、書けない、進まない、やる気が出ないという悪循環に陥ってしまう。この場合は外的報酬を与えても、促進には効果が見られないようだ。書くことに抵抗を感じる学生も多く、大学生活の中でどれだけの文章力を身につけられるかも深く関わってくる。学生の立場では比較対象がないため、指導法の善し悪しを決める感覚を持ち合わせていない。だが、学生と教員の良好な関係は必要不可欠であるし、教員からの心理的、計画的アプローチは学生のやる気向上に繋がる。

どの学生も悩みながら進んでいた。卒業論文とは結局そういうものなのだろう。常にこれで良いのだろうかとか疑問を持ちながら、しなければならぬという使命感で進めていく。しかし、進めれば進めるほど興味、関心が高まる。そうやって自分が卒業論文と向き合った時、はじめて自分の卒業論文が書けるようになるのだろう。

(指導担当：福嶋)

## 河部 サトシ

### 「学校体育が生涯スポーツに与える影響に関する一考察」

本研究では、生涯学習社会における生涯スポーツについて考えるうえで、学校での体育教育がどのように影響しているかについて調べた。今日の日本の教育制度が学齢期に集中し、学校教育終了後には自ら主体的に学習していく人が少ないといわれている。スポーツにおいても学校での体育の授業を最後に、積極的にスポーツをおこなわない人も多いと考えられる。天理大学学生の生涯スポーツへの志向を調査し、今後スポーツを積極的におこなう志向をもつ人と、そうでない人の間に学校体育時点の体育へのかかわり方の違いがあるかを調べることにした。また学校以外の環境がスポーツに与える影響も調べることで、今後スポーツを積極的におこなうためになにが必要かを考えた。

調査結果から、先行研究での同様の調査と比較し、天理大学生にスポーツが好きの人が多く、体育学部を除く女子学生においては先行研究と似た傾向が表れた。そして、学校体育が好きだった人が、将来でも積極的にスポーツをおこないたいと考える傾向が強かった。学校体育が好きになる要因に、体育成績の影響が表れていることもわかった。またその他の要因を調べるために設けた各種質問では大きな傾向が見られなかったことから、学校体育時点で体育を好きにさせることが大切であると考察することができた。

(指導担当：石飛)

## 岸田 紘太

### 「地域アイデンティティの形成－高取町のまちづくりを事例に－」

本研究では、まちづくりが地域アイデンティティの形成にどのように影響しているのかを調査研究した。対象は、地元高取町のまちづくりの中でも特に雛めぐりイベントについて主催者やボランティア参加者に対し聞き取り調査を行い、高取町の地域アイデンティティとの関わりがあるか研究を行った。

聞き取り調査の結果は、主催者の方の聞き取り調査からは、雛めぐりが地域アイデンティティの形成に関わっていたのではなく、高取町を良くしていこうという思い、地域アイデンティティを持った人が雛めぐりをはじめたという結果であった。しかし、ボランティアに参加されている方については、雛めぐり参加前もしくは参加当初と現在を比べると現在のほうが町のために活動しているという意見が出ており、主催者とボランティア参加者の地域アイデンティティには違いが見える。

(指導担当：岡田)

坂本 裕一

### 「校庭の芝生化による地域と学校の継続的協働

#### ～奈良県の「小学校運動場芝生化推進事業」を事例に～

校庭芝生化の目的は単に子どもの運動と健康への寄与や、教育環境の改善（ヒートアイランド現象や砂塵飛散の軽減など）にとどまらず、維持管理に伴う学外組織との連携、開かれた学校の促進にもつながる。そこで利用者自身のボランティアによる管理を主要コンセプトとする「鳥取方式」により、芝生化を試みている奈良県の「小学校運動場芝生化推進事業」を事例に、地域（住民、保護者、行政）と学校が協働で行う芝生管理の現状についてインタビュー調査を中心に考察した。

その結果、①管理活動に参加する人手の不足、②芝生維持のノウハウやスキルの不足、③管理計画が不明確、④管理主体（管理組織の実質的リーダー）の不在、という4点が継続的な校庭芝生の維持において重要な課題だと考察された。また行政と芝生化された学校との間には、「開かれた学校」という観点からみた校庭芝生化の目的に明らかな差異があることが分かった。一方、県の事業自体にも予算面やモデル校予定数の未達成事実など、校庭芝生の維持・普及という点で課題がある。

(指導担当：岡田)

高畑 教雄

### 「大学生のライフストーリーにおける「出会い」の意味

この論文では大学生の「出会い」について研究した。天理大学生に対して「出会い」についてのインタビューを実施し、その人が持っている「出会い」の意味や影響、エピソードを話してもらい、ライフストーリーに注目して調べていった。インタビューによって出てきた「出会い」に関するキーワードやエピソードに注目した考察、また文献にみられる天理大学生以外の学生がもつ出会いの意味との比較なども行い、その中に見える「出会い」の意味を見つけていった。最後にインタビューによって語られたライフストーリーから聞き手（本人）のもつ「出会い」の意味を見ていった。

今回の研究で、人がイメージしている出会いの意味とは「出会いによって自分自身が変化する」と考えているのに対して、エピソードから出てきた、実際の出会いにより感じた出会いの意味とは「人に対する考え方や行動が変化した」と回答していた。このことから人がイメージしている出会いの意味と、実際に会うことによって感じた出会いの意味には違いがあるということが明らかになった。

(指導担当：石飛)

## 立川 直道

### 「生涯スポーツの指導者に関する研究

#### —『天理ラグビークラブのチーム』を中心に—

私は17年間天理でラグビーというスポーツをしてきたが、その中で様々な指導を受け、世代、目標、プレーする目的によって指導方法の違いがあると感じた。そこで各世代の複数のチームが属する「天理ラグビークラブ」を対象に、選手はどのような気持ちでプレーしていて、指導者は生涯スポーツの充実という観点をどのくらい意識しているのかを分析し、生涯スポーツの指導者像を考察した。

まず天理ラグビークラブの体制、及び所属チームの活動をまとめた。また各チームの選手に生涯スポーツをどのくらい意識してプレーしているかのアンケート調査を実施し、その結果をふまえて各チームの指導者にはインタビュー調査を行い、指導時のポイントや天理ラグビークラブに対する思いをきいた。

研究を通じて、選手に活動によって生まれる「楽しさ」を感じさせる工夫が指導者にとって重要であると考えた。特に学生チームではプレーの上達や試合での勝利に、成人のクラブチームでは、プレーすることそのものを楽しさを覚えることができるようになってほしい。そのために今後「生涯スポーツの指導者」に求められるものとしては、競技の技術や知識だけでなく、一方でただ何となく体を動かすためということでもなく、競技の本質を理解したうえでの、楽しみを感じさせる指導であると考えた。

(指導担当：佐々木)

## 田中 正輝

### 「兵庫県下における『子育て学習センター』の実践に関する考察」

社会の大きな変容に伴い、現在、子育てをしている親をとりまく環境は厳しくなっており、子育ての不安や負担は一手に母親にかかってしまいかねない。その母親の抱える悩みを軽減するために、同じ悩みを共感でき、その悩みを相談してもらえ交流の場、また親として自信の持てるための力をつけることのできる学びの場こそ育児に悩む母親にとって、最も将来性のある子育て支援であると考えた。

そこで本研究では、兵庫県の各市町村に設置されている、教育委員会が管轄する社会教育施設である「子育て学習センター」の学習の実際を調べた。具体的には、「豊岡市」、「西宮市」、「明石市」のセンターを訪問し、そこでおこなわれた事業の一部を観察させてもらった。豊岡市では、ワーク形式で子どもとの接し方を学んでいく「子育て&親育ち講座『子どもは“親の姿”から学ぶ』」を観察させてもらった。西宮市では、子育てする母親間の交流の機会を提供する「あいおいおしゃべり広場『はじめまして！引っ越してきた西宮』」と、外部による講義形式の「子育て講座『赤ちゃん時代に大切なこと～愛

された実感のもてる子に育てましょう。～』」を観察させてもらった。明石市では、第一子を出産予定の夫婦を対象とした、子育てについて体験形式で学ぶ「もうすぐパパママ講座」を観察させてもらった。

調査の結果として、どのセンターの取り組みも子育てで不安を解決するための親支援として、参加者の自主性を尊重し、子育ての楽しさを伝え、人とのつながりを重視し、子育てする親として成長できる施策が行なわれていたことを見て取ることができた。また、子育て学習センターは、利便性がよい場所に位置しており、社会的問題解決のための施策として、求められていることを感じた。

(指導担当：佐々木)

## 辻本 晴香

### 「現代社会における保育士の専門性に関する一考察」

社会の変化に伴い、児童をめぐるさまざまな課題が指摘されているが、保育士の専門性と現代的課題とを照らし合わせてみた時、一体何が見えてくるのだろうか。このような問題意識にたって本研究では、厚生労働省で行われた、『「保育所保育指針」の改定に関する検討会』と『保育士養成課程等検討会』に関する審議会について分析をおこなった。

考察の結果、大きな課題が見えてきた。すなわち、保育士の専門性は、その中身だけを取り上げて議論するべきではないということである。専門性の内実にも実際の保育ニーズが反映されていなければならないと思われる。

しかし、一方で課題の解決を保育所(士)にばかり求めているのは、現場は疲弊しきってしまい保育所が機能しなくなってしまう可能性も少なくないだろう。そこで私は、保育士が社会と連携を取り、持っている専門性を存分に発揮していく仕組みが必要であると考えた。保育所(士)・地域社会・家庭の間に立ち、うまく連携させ、それぞれの役割を適当な形で発揮することが出来るようにコーディネートする専門性をもった者の存在がポイントになるのではないかと考えた。こうした仕組みは、児童をめぐる現代的課題や保育の質を向上させるための一役を担えると期待する。

(指導担当：佐々木)

中川 あい

### 「社会教育における趣味に関する一考察

#### ～大阪府大東市のサークルの活動を事例に～

趣味に関する活動(サークル活動等)は、社会教育関係者の中で何も貢献しない個人のものと考えられ、批判されている面がある。しかし、趣味に関する活動は、本当に社会教育としての意味がなく、何も貢献しないものなのだろうか。また、趣味を個人の楽しみとしてだけ行なうことはなぜ否定されるのかということに疑問をもち、「社会教育と趣味」を扱う卒業論文のテーマを選んだ。

本研究では、まず趣味という言葉自体の意味や定義・分類、社会教育において趣味はどのような意味で捉えられ、扱われてきたのかを調べた。そのうえで、社会教育における趣味の意義、趣味(サークル活動)を行なう意義を見出すために、大阪府大東市の社会教育施設2件において館長へのインタビューを始め、現在サークル活動を行なっている人々にインタビューとアンケート調査を行なった。

その結果、個人の楽しみとしてだけの趣味は誰もが楽しく、充実した人生を送るために必要であり、大切なものであった。次に趣味(サークル活動)は、様々な年代との交流や人間関係作りができたり、自ら学ぶ能力がついたりすることが分かった。またサークル活動がボランティアや地域とつながるきっかけとなり、そして地域(社会)貢献へと発展していた事例があった。以上のことから、趣味に関する活動は社会教育における意義があった。

(指導担当：岡田)

野中 君代

### 「子どもの仲間集団について—N市立学童保育を事例に—」

本研究では、学童保育に通っている児童を対象として、遊び集団を男女別人数構成・遊びの種類別に表を作成し、遊びの内容や子どもたちのやりとりについて調査を行った。研究動機は、現在の子どもの遊び集団の実態に関心を持ったからである。

文献の研究や実際の調査の結果、現在では、先行研究で言われていたように、遊び集団の縮小化傾向がみられた。しかし、学童保育という枠組みがあるためか、男女の異年齢集団を形成し遊んでいる様子を多数うかがうことができた。遊びの内容に関しては、ドッジボールが一番人気であること、遊びのほとんどが室外で行われていること、遊びが創造されていることなどを観察することができた。先行研究では、子どもの遊び集団について貧弱化してきているといわれていたが、児童を観察し調査を行った結果、子どもたちが活発に集団遊びしていることがわかった。

(指導担当：石飛)

## 坂東 洋教

### 「映画をめぐる子ども観に関する研究」

私は、学童保育所でのアルバイトを2年半続けてきた。そして、このアルバイトを通して子どもと接する機会も増えた。マスメディアは「子どもが変わった」と騒ぎ立てるが、目の前の子どもをみていると、それほど否定的な存在であるようにも思えないことが多かった。そこで、大人が抱く「子ども観」とは一体どういうものなのだろうかという疑問から、本研究では「映画」に焦点を当て分析を進めることにした。

実際に研究を進める上で、まず収集の関係上、第二次世界大戦後に公開された映画 50本を鑑賞した。そして、日本、アメリカ、フランス映画の子ども（7歳～15歳まで）が主人公、または脇役でも重要な役割を担っていると考えられるもの（アニメは除く）を分析対象とした。そこから、「大人と子どもがともに登場するシーン」「子どものみが登場するシーン」に分け、各国の映画に共通するシーンを細かく設定し、子ども観の描かれ方について考察した。

結論部分では、本研究の考察結果と子どもは大人にとってどういう存在かを述べた論者の意見を交え、子どもが描き続けられる理由について述べた。具体的には、スクリーンの子どものを通して大人たちに子どもの頃の気持ちや様子を思い出させることにより、大人たちのこれからにつなげていくために描かれるものであると考えた。

(指導担当：佐々木)

## 堀口 拓哉

### 「社会教育施設に対する無理難題的要求への対応と課題」

現在の学校ではさまざまな無理難題的要求が増加し、職員を苦しめているようだ。では同じ教育施設である社会教育施設は、どうなっているのかと思い調査するに至った。今回その調査対象にしたのは、奈良県内の10ヶ所の社会教育施設である。この10ヶ所で、無理難題的要求の有無・対応・要求をする人の属性を調査するため、アンケートを実施しその内の3件にインタビューを依頼した。

結果は、年に数回以上無理難題的要求のある施設は3件あり、具体的な対応策はなく、要求をする人は年配の方が多いうことが分かった。一方無理難題的要求がない施設では、同じく具体的な対応策はなかったものの、日常から利用者とのコミュニケーションを図っていることで、無理難題的要求の抑制につながっていると考えられた。つまり利用者との良好な関係を築くことが、社会教育施設の課題であり対応策ではないかと考えられる。

(指導担当：福嶋)



松岡 夏美

### 「天理教少年会による育成活動」

社会の現状は、地域内での子ども同士、または、隣近所同士のコミュニティ関係の希薄化により、子どもたちは団体生活ができなくなっているのではないか。そのため、「自主性」「協調性」「責任感」「思いやり」というような心の育成ができていないのではないかと考える。これらの問題には「核家族化」が大きく影響しているようだ。核家族化は子どもたちの集団生活の場を少なくし、「集団活動」が苦手な子どもを増やしていったと聞く。

天理教で行われている、小さい時から関わる“少年会活動”に現代社会の問題を解決するヒントや参考になることがあると考えた。

そこで、本研究では「集団活動」「宿泊型」をキーワードとして、さまざまある少年会の育成活動でも、昨年平成21年度からこれまで以上に力を入れている『教会おとまり会』を取り上げ、考察した。また、社会に目を向けてみると、青少年活動では『通学合宿』という集団活動を実施していることが分かった。宿泊型の集団活動が、子どもたちにどのような影響を与えているのか、また、何を目的にどんなことが行われているのかを見ていながら、その活動を通して、子どもたちは何を学び、何を感じているのか事例研究した。

その結果、「宿泊型にすることで寝食を共にできるというのが子どもに大きな影響がある」ということが分かった。なんでも、一緒にするというのは、「協調性」を生みだし、「自己発見」ができるなどといった効果が見られるようだ。その活動は「地域に根付く活動」になることで、もっと意味のある活動になると感じた。

(指導担当：岡田)

渡辺 弦

### 「天理大学における学生活動の起源と展開」

天理大学の学生活動において、伝統がどのように出来上がって現在につながっているのかという点について改めて考えてみると、分からないことも多い。現時点で、天理大学の学生活動に焦点をあてて、そのルーツや活動の展開を一手にまとめた記録は存在していないのである。そこで、天理大学の学生活動の歴史を掘り起こし、整理していくことを研究の目的とした。

学生自治会、大学学生部、大学広報部には過去の記録が未整理の状態では保管されていた。そのため自分なりに資料を分類し、学科会、学生自治会を中心に、学生活動に関する記述をまとめ、学生自治会の歴代役員名簿を作成した。そこから学生自治会の活動についての分析を試みた。

現在の学生自治会の役員は、4回生中心で構成されている。そのような伝統ができた理

由について、整理分析した資料から考えられるのは、学科会の存在が大きく影響していたということである。学科会は、自治会に先駆けて誕生した歴史を持つ。学科会は3回生中心に活動しているから、その経験とのつながりを円滑にするために学生自治会役員を4回生で構成する理由になっていると考えられる。

研究を通して、今後、学生活動全般にわたって、各活動団体では、自分達の活動をまとめて一年ごとに資料を保管していくべきだと感じた。それを積み重ねることで、学生自治会、そして天理大学をより発展させていけるだろう。

(指導担当：佐々木)